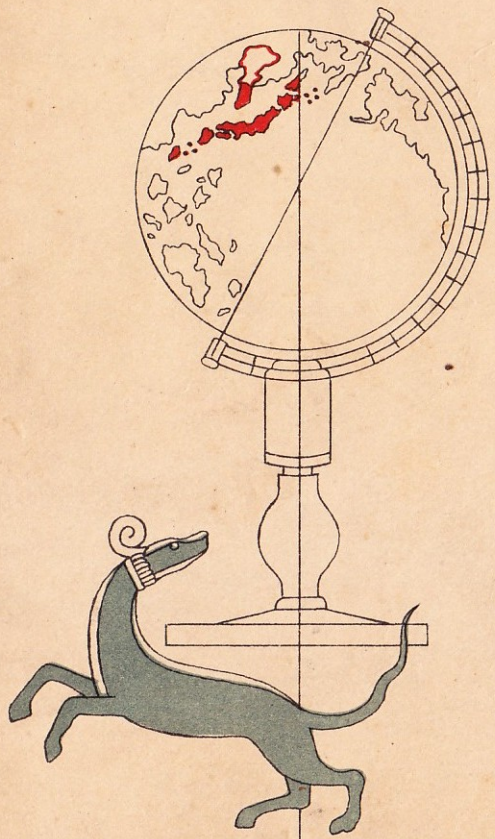
die impersonalien bücher

Bd.11

非人稱命題叢書



白い人形

吉村比呂詩

裝幀 古賀春江

發行所 日本・川崎 詩之家

die impersonalien bücher

I	餘技	竹中久七
II	花心	佐藤惣之助
III	觀念映畫	藤田三郎
IIII	春秋	高橋玄一郎
V	夜へ續く挿話	高木眞弓
VI	自畫像	水町百窓
VII	西史	清水房之亟
VIII	日月	杉浦杜夫
IX	紅鳩	平埜甲策
X	愛の作圖題	能美千秋
XI	白い人形	吉村比呂詩
XII	燕書	佐藤惣之助
XIII	芽柳	古川賢一郎
XIIII	未定	近藤壬子男
XV	未定	岡田重正

以下續刊

非人稱命題叢書

送料 各冊貳錢
定價 各冊參拾錢

昭和八年九月二十日印刷
昭和八年十月一日發行
縣大野郡清見村
牧ヶ洞著者吉村
比呂詩發行所
奈川縣川崎市砂子
二六詩之神
家編輯部發賣所
東京市神保町一ノ
東京書籍商組合

白い人形

詩集　吉村比呂詩

非人稱命題叢書第十一篇
千九百三十三年十月詩之家刊

貧しき〝白い人形〟を
妹八重子の思ひ出に

（詩十九篇）

白い人生

白い夢。白い憂鬱。白い白い果てしない謎。
白い雨。白い霧。白い白い限りない原野。
白い花。白い感情。白い白い時間の廻轉。
私は白い。少女の様に。白い白い私の人生。
あゝ。白い白い。只。白い白い私の人生。

花

アナタの白い生理の中に、白い花瓣の秘密がある。

アナタを取り巻く白い光彩。白い光彩の中のアナタの體溫。そしてまぶしいアナタの愛情。

けれども私は近づけない。

アナタの白い微笑の蔭には、キラリと青いトゲがある。

風に漂ふ高い香に、白いアナタの魔術がある。

季節の發生

春光は、容ちをととのへた。

安定した、小さい花の明るい方向。

記憶はすつかり、大地へかへさう。

風がひろげる新地圖よ。

空いつぱいに、樹木の緑は炎上する。

硝子の朝

窓には白い硝子の器を、華麗な明るい音樂を、日の輪の優しい踊子達を、そして季節の花花を、光まぶしい夢の天使を、狹霧の樣に飾つた春。

私は私の文學を、黄色い水鳥のくちばしを、青い抒情の銀粉を、空氣の間に撒き散らかして、廣々とした海洋を、至純な少女の生理の風を、抱へきれない幸福を、そして、そして、表現出來ない感情を、內部の計器に盛つてゐる朝。

光が私を呼んでゐる。

ひとつのもの

ひとつの夢よ。ひとつの花よ。

そして、そして、ひとつの生命よ。

光よ。匂ひよ。

あゝ、そして、そして、私の、私の、ひとつの悲哀よ！

哀しい水質

沓く、水を潜りぬけて來る、青白い夢の花線に、小さい抒情の花らを咲かせて、
私の感情を捕虜にする、可愛いアナタの明眸よ。

何時までたつても、月夜の古い貝殼から、抜け切らないでゐる、かほそい思想
よ。

でも、これが私の眞實なら、死ぬまで私は泌々と、胸に抱いて歩いて行かふ。

あゝ、無色に澄めない、哀しい私の水質よ！

青　草

原野に青く擴げられた、聖らかな大地の文字について、

文字を彩ぞる、涼しい自然の結晶美について、

朝は昆蟲とならむ。

光を追ふ

ひとつの小さい、星の光を追ひながら
私は白い、夜霧の夢の中を行く。

たゞ、これだけで好いのか知ら。
ひろい、ひろい、はてしない疲勞。

私は、輕い咳をする。

距離

月世界の青い色彩の秘密について、少年時代の淡い思ひ出の匂ひについて。

距離よ。美くしき鳥類の翼。

秋

頭上に青き火を點じた太陽。

銀玉を含みて高き雲表の白狐。

鬼氣に狂ひし谿の芒(すすき)は、茫々として白き手を延べ、むなしく空(くう)をつかまむとする。

月

月は靜かに窓をあけ、月はだまつて手をさし延べる。

月はしみじみ私を見つめ、私の胸を照らし始める。

すると私は少年(こども)になり、少年の私が笛を吹く、綺麗な音色の笛を吹く。細い音色の笛を吹く。

悲夜低唱

此の世の青い空間に、何時も綺麗な夢を持ち、漠然と、嬉しい希望の光波を包み、明日への小さな期待を投げて、わずかな花園を築いてゐる。

ひと一倍の貧窮と、病魔の弱いトリコとなり、多くの冷めたい笑ひをあびて、なほもこはれた樂器を捨てない。

不幸な若い詩人である。

月曜日

消化器が空つぽうなので、呼吸器は、白い花瓣を匂はして居る。

硝子面に作用する風の電光。朝。窓を開けると、私が正しく、私の瞳に到着する。

——やがて私を支配する、健康な青い食欲。

——同時に落ちかゝつて來る地球の引力。生活の石。

私は一個の機械となる。

朝の風と窓

風とは、朝の花嫁なり。

涼しい色の扇をひろげて、昨夜の夢をきよらかにする。

窓とは、大きな鳥類なり。

空いつぱいに銀翅を張つて、眼に今日の太陽を置く。

失題

卓上に靜止して居る、小さい一個の氷の白瓶。

その中に發光する、すばらしい一グラムの散藥。

だが、私は一歩の處で立止る。

（私は明るい窓外を見る。）朝顔のやうに空を仰いで、幸福な時間を考へる。

哀れ。青く解消する、美くしき死への誘惑よ！

夜の感傷

夜になると、彼女は白い、花葩の匂ひを振り撒き乍ら、青い空氣の向ふ側から、靜かに、光のやうに歩いて來る。

僕は秘密の扉を開いて、彼女の爲に、綺麗な椅子を用意する。

ツバメの樣におしやべりしないが、エスプリ面に交流する、若い電氣の唄を聞く。

月の優しい微笑の蔭で、時間の外の貝殼の中で、古風な詩集の頁を切る。

山里の雪

一、雪の夜は、若く優しき妻ほしや。溫(あたゝか)き炬燵(こたつ)にありて、春の日の、喜びを語りあはむに。

二、友もなき山里なれば、吹雪する夜は、わけて哀しや。インキの氷りて、便りせむにも、書くによしなく。

三、窓もほたほた埋れる程に、さても靜かに降り積む雪よ。炭火赤々おこしてあればさ。

四、あたゝめし蜜柑をむけば、雪夜も花の咲く心地して、獨居(ひとりゐ)も、また愉(たの)しきものぞ。うつすらと、我が手の指も春を感じて。

五、雪夜の月は、仰がぬものぞ。呪ひに冴えし、死面の如く、その光、あまりに青く、ふるへて凄きものにてあれば。

六、生鰯(なまいわし)、一匹皿に燒き添えて、熱燗一本炬燵の上に、置いていそいそ座ればな。

七、障子明るき雪の朝こそ、しめやかな、疊の色の青みなつかし。ほのかに甘き光を感じて、去年(こぞ)植えし、梅のことなど氣にかゝれば。

一つの見方

冷めたい死への白い過程。時間とは——結局青い宇宙の廻轉。

花は花。月は月だけ。

光——それは小さい生命(いのち)のいたづら。

あゝ————僕よ！

松の大木

大地に強く根を張つて、空に喰ひ込む松の大木。

〝かの美麗なる花瓣は、終生不用に御座候〟

キラキラと光る千年の濃緑（こみどり）――松葉は空をたべてゐる。